

アルノ・シルソン

レッシングとキリスト教

—これまでのレッシング研究における
あまりに安易な先入観に対して—

ルドルフ・プロット訳

多くのキリスト者にとって、詩人にして物語り作家ゴットホルト・エフライム・レッシング (1729-1781) と彼の作品に関する議論には、一世紀以上も前から結論が出ているように見えるが、この結論は、良いものと言えぬのは言うまでもない。

たしかに、鋭敏な思想家であり啓蒙家でもあったこの詩人が宗教について書き記した事は、(それも特に晩年の10年には特に多かったのであるが) キリスト教の名誉になるといふより滅びに役立っているように見える。そしてこのような判定は、わけてもレッシングの有名なドラマ「賢者ナータン」にあてはまるようである。

レッシングはこの「賢者ナータン」の中で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの宗教を同一視し、相対することであらゆる宗教を計画的かつ徹底的に解体しようとしたのではなからうか。この劇では、もろもろの宗教的確信や実践を克服して純粋な人間性と寛容を肯定しているようにも見えるのではないか。そのため、レッシングは根柢の乏しい寛容を説き教える人、純粋な「人間性の宗教」の使徒とみなされるようになったのは当然ではなからうか。

このような背景を見返すならば、レッシングの生誕二百五十年の年にあたって、多くの批評家が否定的の評価を変えられなかったのは不思議なことではない。かかる先入観があまりにもあからさまに深く強いために、レッシングの作品の解釈は一方的な方向に進みすぎてきた。

しかしそのような解釈が、レッシング自身と彼の作品に見られるテーマに対する最終的解釈ではないことをこの小論によって示したい。

従来の事実に基づくことの少い、論争的な先入観で歪められてきたレッシング像からレッシングを救い出すのが望ましいようである。それはかなり困難なことでもあるようだが。

キリスト教の対立者か？

レッシングが心の奥底でキリスト教の破壊を思いめぐらしながらも、著作の中ではこの意図を無理に隠しおおせたというのが、まず第一の根絶不可能な偏見であろう。

しかし1770年代のレッシングの活動をみれば、このような偏見に同意せざるをえないのではないだろうか。

レッシングは、自分の著作を通してではなく、「或る無名の人」の作品の中から選んだ7篇の作品の発表によって、「スケールの小さなとるに足らない渦ではなく、キリスト教を直撃する大嵐を巻き起した」のである。

レッシングが最後まで名前を明らかにしなかったハンブルクのこの東洋学者 H. S. ライマールは、今までにない鋭さと深い学識と巧みな表現に基づく論理により、あらゆる啓示宗教の主張、ことにキリスト教のそれが全く誤っていることを証明しようと試みた。

そして、彼の攻撃の矢はもともと聖書の歴史的信憑性に向けられていた。

ライマールは非常に線密に、鋭敏な歴史感覚をもって諸々の矛盾をあばき、疑問点を明らかにして、プロテスタントのように聖書のみを信仰のみなもととしていたキリスト教信仰のあり方に揺ぶりをかけた。彼にとっては、理性が全ての宗教の唯一、十分な源泉であったからである。

レッシングはこの文章を発表することで、人々を驚かせ混乱させてキリスト教を疑わしいもののように思わせて、このライマールの急進的な考え方を自己の立場として確立しようとしたのではなかろうか。

歴史を厳密に見る人ならば、次の点を注意深く区別しようとするだろう。

レッシングはこの「断章」を発表したが、同時に「対比主題」：すなわちそれに対する論駁をもそれに加えて出版しているのである。

このことは、あの「無名氏」の説と違い、レッシングにとって、キリスト教の意義と信憑性に論駁を加えることが問題でなかったことを明確に示している。彼は純粋な聖書主義では不十分であることを、同時代の多くの神学者よりも明敏に認識していたのである。つまり純然たる歴史的証明すなわち歴史的起源とそれに

結びついた奇跡を自覚することでは、キリスト教の正しさと有効性はもはやほとんど証明できないのである。従って、キリスト教の啓示が本質的に重要だと思う人は、自分の立場を弁明できる新しいやり方を捜さなければならない。

聖書の「ことば」を無思慮にかたくなに守ることも、キリスト教初期の拡大と定着の時代には必要であったかもしれない奇跡を新しく掘り出すことも、または何十年も経てば消え失せてしまう「偶然の」歴史的事実も、どれひとつとしてキリスト教の真実性の根拠にはなりえないと論証する者に対して、レッシングは辛辣な批判を浴びせた。というのは、そのような「跋を引いたやぶにらみの」神学は、彼の確信から言えば、キリスト教を完全な破壊へと導びくものだったからである。

純粹に歴史学的な分野ではレッシングはあの無名氏の説に対し、何も言うことはできないが、キリスト教の歴史的側面にいくら悪い点を認めても、ライマールスの説は全面的に否定している。このことはあまりにもしばしば見落とされている。この点における攻撃に應えるために、レッシングはまったく新しい方法をとった。

すなわち、レッシングによれば、初期のキリスト教だけを切り離して分析したり、あまりにも遠くて確かめられない過去を見ることによってではなく、それよりもキリスト教の発展や全人類のための実りや、なによりも現在の体験できる救いに至る現実が、キリスト教の真実を証明できるのである。

つまり、歴史的に離れた過去においてではなく、現在の経験—それに対してはあらゆる急進的な聖書批判はまったく無力なのだが—によって、キリスト教はその真実を証明し確信を与えることができるというのである。

キリスト教は、実際に起こった奇跡と、成就された預言と、さらには欺瞞と偽りにも基づいていると、レッシングは皮肉をこめて書いている。

キリスト教は、1800年の歴史の動きの中で形成され証明されてきたことによるのみ、意義があり価値があると確信されるのである。レッシングにとっては、キリスト教の真理の根拠となっているのは、聖書の記述を急進的に批判することによっても疑うことのできないこのはたらきの歴史である。

この論理により、レッシングは当時考えられていたものよりも、はるかにキリスト教に近い立場に立っていたといえる。敵としてではなく、「まことのキリスト教」と単なる「ことば」以上の聖書の「精神」を強調する者として、また危なげな土台に気づかずにいる神学を苛借なく批判するただ一人の者として、レッシングは認められなければならない。結果的には、レッシングは当時のほとんどの

神学者よりはるかに神学的に論証を行なっているのである。彼にとってのキリスト教は、人類の歴史を包括的に見なしかつゆずることのできぬ段階の一つであり、いくつもの偶然の重なりによるのではなく、神の摂理が導く力によって存在するものなのである。

神の摂理はどこにも存在するのであるから、イエスの奇跡によらずとも、「絶えず存在する（キリスト教の）奇跡」が真理の決定的証拠となる。人間の理性の鋭さと歴史批判的鋭さではなく、神の摂理自身が、キリスト教に最終的正当性を与え、永続的意義を与えている。そしてそれは、体験しうる歴史のはたらきによるのである。

理性論者？

至高にして究極のもの、かつすべての真実の唯一の基準が人間の理性であるとみなしていたレッシングは理性論者とみなされなければならないのであろうか。この説に反対するのは困難である。最終的にレッシングがはっきり強い調子で要求しているのは、すべての啓示の真理が段階的に理性の真理となっていくことである。

ただしそれは人間の理性が、啓示の真理を自分自身の真理であると認識していけば、人類は最後には生かされ救われて、人類は発展の最高の段階に達すると有名な「人類の教育」（Die Erziehung des Menschengeschlechts）の中で、レッシングはそう述べている。

これにより、すべての啓示の特性とその存在の意義は否定されていると思われるかもしれないが、決してそうではない。レッシングの理性概念には独特な特徴があり、それは神学的な面を指し示している。そこでは人間の理性の真理と神の啓示の真理を対立させるのではなく、相互に関係づけられていることを強調し、ただの理性主義とはまったく違った解釈が生み出されている。つまり理性は、啓示に反したり啓示なしではなく、啓示の真理においてこそ真の自己完成に達する。言い換えれば、人間が神の啓示を受けてそれを自分なりに思いめぐらすことは、自由を失うことや自己疎外に陥ることではなく、より豊かで深い意味での自己発見に導くものなのである。それは、この時代においては理性が人間の根本的な特性とみられていたために、理性が信仰の領域で働き出すやいなや、人間は自分のアイデンティティ（Identität）と本当の意味での使命（Bestimmung）に気付くということである。

それは、人が神からはるか遠く離れたところにいることではなく、まさにその逆であって、神の啓いた真理に満たされ、それを確信したときに、本当の意味での使命に達したことになるのである。

満ち溢れる希望を持ちながら疑いをいだいて

今日、現代の宗教を批判する理性主義の概念と、レッシングのそれとはまったく異なる。

彼にとって人間の理性は非常に神学的な面をもち、それによって神と神の啓示に対して開いている。そしてこのように開かれた状態において初めて、理性としての本質が明らかになってくるのである。そうはいうものの、現代の理性主義とレッシングの理性主義とをどう区別するかがすべて表明されてはいない。レッシングは他の多くの人々と異なり理性を、そしてまた人間を完全な啓蒙主義時代の見方ではとらえず、そして完全ではないからこそ理性に徹底した自己規定や自律性を持たせてはいない。彼によれば、人間の理性はまだ自立への途上にあり、まだ新しい情報を聴きとり吸収していかねばならない状態にある。人間の理性は、長期にわたる「学習」と「教育課程」(Erziehungsprozess)を通してしか自分自身の本質を悟ることができない。それゆえに理性は、人間の歴史と切り離して考えることはできない。人間の理性は、その可能性を全うし啓蒙されるために、一方で新しい外的刺激を、とくに神の啓示を必要とする。と同時に人間の理性は、奥深い完全な真理と完璧な啓蒙への憧れが無駄なものでなく、理性の求めるアイデンティティと自己実現がいつかは実現するであろうという確信を必要としている。

人間の理性はまた歴史的な状況にいるからこそ、より偉大な理性や神の摂理を必要とし、そして神の摂理が歴史を理性的に導いていることを求めている。その歴史の特徴は段階的に進歩し、最終的に人間の理性の教育を神の啓示によって成就するであろう。この歴史の特徴は明らかとなるであろう。

レッシングの特に晩年の著作「人類の教育」(1780)で紹介されているこのような歴史の見方では、未来には希望を持ちながら、しかし疑いをいだいている。ここでは、レッシングはまさしく歴史における神の理性を強調している。

「歩めよ、永遠の摂理よ、気づかぬほどの一步を。

ただ気づかぬことで、あなたを疑わせないで下さい。

私にあなたを疑わせないで下さい。

たとえ、あなたの一步が私には後退に見えても。」 (§91f)

ここでも詳細に見てゆけばわかるように、レッシングの考え方は、従来偏見をもって見られてきたよりも奥深く多面的である。そして、人間の自己発見と自己実現に必要な理性の特質と疑う余地のない役割をレッシングがいかに強調している、非キリスト教的あるいは反キリスト教的理性主義とは何のかかわりもないのである。

純粋な人間性（Humanität）の使徒か？

レッシングの思想には、純粋で完全な人間性と寛容（Toleranz）以外は、宗教の入る余地もないのではないかという第三の他の偏見よりより一般的に括まっている偏見もゆるがせられるのである。

たしかにレッシングの発言の多くは、一見したところ、この偏見の正しいことを示しているようである。「キリスト教における実践の忘却」に対する彼の批判は厳しいが、それは愛の欠乏に対して、また行動するかわりに理性の遊びに逃げ込むことに対して、キリスト教のもっとも高貴な掟、即ち隣人愛を尊重しないことに対して、遠い将来ばかりを見るあまり現在に対する配慮の定らぬことに対して、さらには人間的に行動するかわりに信心めいた夢想にふけることに対して向けられたものである。

このことはレッシングの全著作に一筋の赤い糸のごとく一貫している。レッシングは、後の神学的論争のさなかにこの問題に関する小さな著作を著わしており、そこでキリストの愛の掟の並はずれた役割を強調している。「子らよ、互いに愛し合いなさい」と主の最愛の弟子ヨハネの遺言は言い、「愛することを実行すれば、それで十分である」と言っている。

この愛の掟を強調することによって、レッシングが明らかにすべての宗教を「実践」へと究極的に解体していると言っているのだろうか。ここでも事情はきわめて複雑である。

レッシングは人間性と寛容性の実行を強調しているが、それは彼にとって真の宗教の完全な定義でもなく、宗教の代わりになるわけでもない。

あの実践こそむしろ真理の現われとなるのであり、それは今日、「正しい行ない」（Ortho-Praxis）が「真の《信仰》の教え」（Ortho-Doxie）すなわち正しい信仰の現われとみなされている通りである。

さらに、宗教の基本である確信こそが、人間性の要求と「愛の行ない」の実践を当然のものとして実行に移す可能性のあるものにしてている。もっとはっきり言

えば、人間性とはどんな宗教をも絶滅することを意味しているのではなく、歴史的に影響を及ぼしてきた摂理を信頼することにより初めて、その本来のかつまた当然のことながらその断ち難い正当の権利を与えられるのである。

この全世界が最後に無意味に終わらないために、また神の寛大で叡智に満ちた摂理がすべての人類のためにあるからこそ、人間の行ないは実行する場と意義を与えられているのである。歴史の中にはたらく摂理への信頼は、人間の行ないを静観主義（Quietismus）や受動的宿命論（Fatalismus）に導びかない。神の摂理は人間的なよき行ないをもろともに包含するものであり、それがなければ、摂理は真に働き出ることができないし、働き出ようもしないだろう。だから、摂理を信頼することは行ないを無視するのではなく、むしろ人間的な意義深い行ない、人間性と寛容を求めているのである。

歴史の意義の解明と神の摂理

現在行われているレッシングの説についての先入観を振りかえる仕事はその半ばしかなされていない。彼の時代と我々の時代におけるキリスト教の真理と有効性に関する議論に寄せたレッシングのたいなる貢献が潜む彼レッシングの本来の立場は何処にあったのだろうかという疑問が自ら湧いてくる。

レッシングというこの啓蒙家（Aufklärer）は、その言葉の厳密な意味において、神学者とはいえないということは少なくとも明らかである。レッシングは明白に「神学を愛する者」とだけ自称しているのであるから、彼の著作の中にキリスト教の真理を順序正しいシステムとして見出すのは難しいし、彼は、「いかなる」システムにも従う必要はなかったし、自分自身のシステムも作らなかつた。しかしだからといって、神学と信仰のための彼の役割りについての結論が出されているとはいえない。

システムを作らぬ人、また「しろうと」こそ、広い視野を有していて、その時代の問題についての最も適切な答えを出すことがある。そこで、レッシングの神学的論争に関しては、そのすべての作品においてどのように一貫したテーマが選ばれているかを問い続けねばならない。

摂理のドラマとしての「賢者ナータン」

人間の啓蒙をめざすあらゆる努力が失敗に終わり、端的に非理性的、また無意味にならないために、歴史の始まりにおいても、まん中においても、終わりにおいても、歴史の動きは理性的で意義のあるものでなければならないはずである。現在、人間の理性はまだ進歩の途上にあるので、このような「歴史が理性的で意義のある動きであること」を証明できるはずもないし、保証もない。それどころか、人間の理性は神の摂理と美德に対してひどい疑いと異議の申し立てを起している。だからレッシングは、人類全体の歴史とそのなりゆきの意義を捜し求めるときはいつも、歴史の中における神の摂理のはたらきに希望を寄せたのである。

神の摂理の力とその真の理性が窮極的に勝利を得るに違いないという、神への信仰に基ずく自信があったために、レッシングは歴史の冒険を生き抜いたし、彼にとって過去も現在も未来も人間の自己実現の保証された場となっていたのである。

このような考えは、とくに後期の作品、「賢者ナータン」の劇作のテーマとして大きく取り上げられているが、それ以外にも、他のことに戯曲や演劇論などに見られる。ナータンの「叡智」(Weisheit)は一見したところでは、単に啓蒙的で冷静な、常識程度のものに見える。けれどもこの点においてこそレッシングの深い理性の概念が意味を持つてくるのである。

舞台の上のナータンは、神によって印された人物であって、ヨブと同様に、厳しい運命を通して悩み苦しみ、この苦しみゆえにはほとんど絶望して、神に文句を言ったり、自分が正しいということを強調したりした。しかし彼は、自分のせいではない不幸や自分の人生の無意味さのために、人間として絶望し挫折してしまうのではない。それどころか、それを通して清められ成熟したものとして、又深く信じることのできる人間として生まれ変わったのである。

ドラマの中でも、見落されてしまいがちな場面(4幕7場)でナータンは内心に隠して沈黙していた自己の存在の中核をなすものについて明らかにしている。ナータンは「7人の希望に満ちた息子たち」と妻をキリスト者たちにより焼き殺されてしまい、彼にとって人生のすべてが暗闇の淵に沈み、無意味に思えた。ナータンに疑いがわくのは当然なのであるが、それにもかかわらず彼は神の寛容と知恵に対する絶望に陥ることはなかったのである。この事実をナータンは次のように言葉で表わしている。

『やがて理性を次第に取り戻しました。理性は穏やかな声でこう言うのです。

「それでも神はいらっしゃるのだ。こうなったのも神の御心なのだ。さあ、お前がとうに会得していることをすぐに実行しなさい。お前がしようとさえ思うなら、実行することが会得することより難しいということは決してない。さあ立ちなさい。」

私は立ち上がり、神に向かい、「私はそうします、実行することをあなた様がお望みなら。」と叫びました。

ちょうどそのとき、あなたが馬から降りて、マントに包まれたあの子を私に渡したのです。その際あなたが言ったことも、私が申したことも、今はもうすっかり忘れてしまいましたが、私が覚えているのは、あなたから受け取った子供を私のベットに運んでくちづけし、そしてひざまずいてすすり泣きながら、「神よ、あなたは7人の子供に対して、確かにひとりをお返し下さいました。」と申したことだけなのです。」

ここに現われている神への従順は、歴史の中で、歴史と人のためである神の現存（Dasein）が、人間の行動を不必要とすることではないということをナータン自身がこの場面においてもっとも深く示している。

大きな犠牲を再び払うことが必要になっても、ナータン自身は問題の解決に向かって忍耐強くすすんでいく。すなわち、彼は彼の養女レヒア（Recha）の正確な素姓がついに明らかにされて、もしかすると娘を手離さなければならなくなり、いま一度家族を失うという前と同じような犠牲を払わなければならない危険に陥ったとき、ナータンは自分から犠牲を払うことをまるであたりまえのこのように成し遂げた。ナータンは次のように言っている。

「もし、神の御心が私の手から娘（Recha）を取り上げられるのなら、私は御心に従おう。」

ナータンの人間性は（Humanität）彼の深い信仰の裏返しであって、言い換えれば、人間と人間の幸せとに対するかかわり方に見られるナータンの特質は、神の摂理との根本的な関係の結果にはかならないのである。

神への積極的な献身

レッシングは、みずからナータン劇の正しい解釈のヒントを「ナータンの予告」（Ankündigung des Nathan）の中で示した。劇が全く思いもよらない別世界の空想のものではなくて、むしろありうる現実世界の解釈であり、それに対する世界のあり様を明らかにしている。「私がこのドラマにおいて考える世界とはきわめて自然な世界である。この世界が、劇中で考えた世界と同じように実現されていないということは、しかし、神の摂理のみのせいではない。」とレッシングは言っているが、ここで問題になっているのは人間であり、人間には世界を実現するま

ことの役割が与えられているというのである。この世が、根本的に人間にとっていちばんよい世界であるために、いくら表面的には非理性的に見える現実の中でも、神の摂理が意義を与えて深く働きかけるのであり、それゆえに自分自身を神の摂理の働きにまかせてもいいのであり、また自分も努力してナータンのごとく積極的に神に従い、摂理のわざを成し遂げることが許されているからである。人間と神の共同のはたらきと自由の問題は、最終的に人間の側から区別するのが難しいのだが、信仰の立場からとらえた現実の姿として、ことに印象的に取り上げられている。

レッシング自身が、根本的にこういう態度と考えを抱いていたことは、全作品を冷静に見れば一目でわかるが、ことに個人的な書簡において多く表わされている。

「これから起こるであろうことは、神の摂理にまかされる。未来に起こりうることに對して私ほど気にしないでいる人があるとは信じがたい」と彼は言った。

彼の伝記も、ナータンの置かれたヨブ的状况に非常に類似した状况を示している。

妻エーファ・ケーニヒとは、経済的困窮により遅く結婚したのだったが、1778年レッシングは、長男の出産の折に、息子ばかりか妻までも死によってもぎ取られてしまったのであった。

この時レッシングが表わした感情は、「神に対する従順」を言葉にしたもので、当時流行していた理屈中心の「理性信仰」というよりもむしろ個人的なひとりの人格として摂理のなりゆきに対する信頼のあかしの表現をうかがわせる。

そしてここに、批評家、論争家、自由主義的な啓蒙家としてのレッシングとは違った像が浮び上ってくる。真実に忠誠であろうとする者は、「神の摂理への信頼」とそれに付随する「神に対する信頼に基づく従順」が、レッシングの個人的で思想的な存在の特徴的な中核であるという結論を認めねばなるまい。

歴史の最終的な意義と、歴史に基づく理性と、歴史の中での人間の行ないと使命についてのレッシングの問いかけは、彼の作品の中で、ひとつのはっきりした神学的解答となって現われてくる。それがたとえ不思議な驚きに満ちたことであったとしても、この結論はうけとめなければならない。

レッシングはキリスト者か？

このようなレッシングの信仰に満ちた態度の本質は、私たちに何を伝えているのであろうか。もっとはっきり言うなら、「レッシングのこのような根本的な考え方は、キリスト教的といえるのであろうか。」という事である。レッシングの晩年の未出版の断章（Fragment）「キリストの宗教（Die Religion Christi）」（1780年）がこの問いへの答えを出している。

レッシングは、キリスト教宗教（Christliche Religion）とキリストの宗教（Religion Christi）を区別している。キリスト教宗教の中心は、宣言され、神の子として信じられているイエス・キリスト自身である。それに対して、キリストの宗教とは、イエスが生活の中で行っていた宗教のことである。これこそ、レッシングの心の底の確信である。

あのキリスト教信仰（Christus-Glauben）は、キリスト者たちをほかの宗教共同体から区別するためのものであって、レッシングには殆んど何の関心もないのであった。それどころか、「神への信頼にもとづく従順は、我々の神への思いこみとは何のかかわりもない。」と言っている。愛の行ないというキリストらしい行ないをまったく忘れていたような、キリスト信仰告白の正当性を固持する態度は、彼にとって疑わしいものであった。けれどもやはり、レッシングは自分をキリストに賭けているのである。しかしそれは、道徳の師であり真の信仰の師としてのキリスト、つまり「キリストの宗教」の師としてのキリストに賭けているのである。

この「キリストの宗教」を、私たちがイエスの地上の存在をわかっているかぎり、レッシングは正しく見抜きそして自分の人生の根本とした。聖書学者達の一一致した見解によれば、「信仰」が地上の人間としてのイエスの地上における人生のすべての中心であった。この場合、信仰は神に対する完璧な献身を意味し、神の御旨に対する愛と従順を意味する。そしてそこに含まれているのは、完全で無条件な神へのコミットとイエスが模範的にわが身で示されたこの人間の世に尽くす自由である。このような視点からレッシングの根本的態度を見るならそこにはおのずから構造上の類似が目立つ。彼の神の摂理に対する無条件な信頼と、神に対する信頼に基づく従順と、人間性へのコミットは、どんなキリスト者にとっても、イエスの模範に避けることのできないほどはっきりと示されている信仰の根本的態度の要素である。

キリスト者であることの核心と根本的な態度とは、「イエスにならう」態度で

あり、それは神と父に対する揺ぎなき信仰と、その父の寛容と知恵に満ちた導きであり、つまり、無条件な神への信頼に基づく従順とみなすことができる。そうはいっても、キリスト者の信仰告白のすべては言い尽くされていないかもしれない。そして、伝統的に定義されているキリスト者の思想に欠けている所があっても、少なくとも「キリストの宗教」(レッシングが言っているように)ここに正しく表現され、現在と将来のキリスト者が忘れてはならない意義が思い起こされている。

以上のことから、レッシングをキリスト者と呼んでもいいのだろうか。この問いに答えを出さずにおいても、私たちの信仰に基づく人生にレッシングが寄与したことは疑う余地がない。

著者 アルノ・シルソンについて

1945年生まれ。神学博士。チュービンゲン大学・カトリック理論学科に在籍。

レッシングに関する研究としては、1974年に「Tübinger Theologische Studien」の第3巻として出版された、「神の摂理の地平線の歴史—G. E. レッシングの歴史理論に対する主張について」がある。

CiG*—Aufsätzen に2部にわたり示されたシルソンの著作は、「Kleinen Vandenhoeck—Reihe」において、「レッシングのキリスト教」の完成版として出版される予定である。

* Christ in der Gegenwart

この小論文の訳を大いに直して下さった森川智子様と中尾光延様に感謝致します。